

【報告】

## ヴァッサー大学 (Japanese/Chinese Department) との交流プログラム

菅 聡子 (国際日本学)

大学間協定に基づいて、2006年の7月から約二ヶ月間、ヴァッサー大学で日本語を学ぶ学生たちが、日本語学習のために本学に滞在していたことは記憶に新しい。グローバル文化学環ならびに英語圏言語文化履修コースの学生たちとの共同ゼミや交流を含め、充実した毎日を過ごして帰国していった。

この夏の交流と呼応するかたちで、ヴァッサー大学から秋の「Culture Day」への参加と授業等を通じての学生たちへの知識供給の要請があった。これにこたえ、大学院イニシアティブの事業の一環として、2006年10月31日から11月4日まで、教員・菅聡子ならびに大学院博士後期課程に在籍する三名の学生、倉田容子・武内佳代・金玖娃がヴァッサー大学へと派遣された。

11月3日に開催された「Culture Day」への参加をメインにしたプランであったが、滞在中は、初級～上級の日本語クラスに毎日参加し、受講生たちと交流を深めた。クラスを担当するヴァッサー大学の先生方とともに、授業の運営に加わり、とくに上級日本語クラスでは、学習の題材に選ばれていた俵万智『サラダ記念日』について、武内佳代がその出版の背景などについて短いレクチャーを行った。

ヴァッサー大学では、初級・中級クラスまでは、毎日、定まった時間帯に日本語の授業が行われる。1コマは「70分」で、本学よりも短い。語学学習においては、このような集中的な学習が高い効果をあげられると思われる。実際、受講生たちは、日本語を学び始めてまだ日が浅いにもかかわらず、かなり複雑な日本語をあやつっていて、私たちが驚かせた。初級・中級クラスでは、教科書にそった学習というよりも、スキットを演じたり、シーンに応じて日本語の言い回しを変更する練習をゲーム方式で行ったり、それぞれに工夫がこなされていた。一般に、欧米系の人びとにとって日本語は学習するのが困難な言語であると思われるが、上に記したように、集中的な学習の成果が受講生たちの短期間のうちの上達に反映されていた。また、上級レベルの学生のみが受講する「日本文学」のクラス(担当：土屋浩美先生)では、菅が、日本の古典作品ならびにCanonの、少女小説等への二次使用について講義をおこなった。受講生たちは非常に高度な質疑ならびにディスカッションを行い、学部の3～4年生が中心であることを考えても、やはり、私たちが驚かせるものであった。

ちなみに、日本の少女小説にも大きな影響を与えた『足ながおじさん』の作者、ジーン・ウェブスターは、ヴァッサー大学(当時は女子大学)の卒業生であり、作中に登場する女子大学や大学寮は、いずれもヴァッサーのそれがモデルである。大学図書館には、未整理のウェブスターの書簡などが所蔵されているそうだ。英文学研究に関心のある学生には興味深い資料だと思われる。

11月3日の「Culture Day」は、日本語ならびに中国語のプログラムを履修している学生たちによるイベントで、春と秋の二回、毎年行われるという。教員サイドからすれば、Japanese/Chinese Departmentの主催する重要な教育プログラムの一つだが、学生たちにとっては、日中両文化にどのように親しみ、また語学力を身につけているか、披露する機会でもある。なかでも、本学に滞在中の体験を紹介したスライド・ショーが学生によって行われ、来年の訪日を心待ちにしている彼らの様子も伝わってきた。

私たちは、ヴァッサー大学からの要請にこたえて、現代日本のサブカルチャーについて、菅が講演を、また倉田・武内・金がそれぞれ発表をおこなった。実のところ、日本語を学習している学生たちのほぼ90%以上が、日本のサブカルチャーに深い関心を持ち、翻訳ではなく直接にそれらを理解したい、という日本語学習の動機を持っている。日本文化といえば、能・和歌・茶道・歌舞伎 etc.を連想した(あるいは連想するだろうと日本人は考える)ものだが、アメリカの若者世代の関心は、ほぼ完全にサブカルチャーに向けられている。視点を変えれば、これらをテーマとすれば、学生同士の共同研究やゼミがより熱意をもって実行されうるだろう。今後の両校の交流プログラムを考える際に、彼らの現実的な関心を組み込むことも重要だと感じさせられた。